Ⅳ　外国語・外国語活動　３年次の成果と課題

１　成果

(1)　コミュニケーションの目的や場面，状況を設定した，主体的な学びを支える単元構想

コミュニケーションを行う目的や場面，状況を子どもたち自らが設定する活動を単元に位置付けたことにより，単元を通して学びへの主体性が持続したことが成果である。英語を用いた異文化間交流が動機付けとなり，話す内容や使用する語句や表現を仲間と対話しながら「選択・決定」する場を設けたことが，主体的な学びにつながったと考える。

３年次の研究では，オーストラリアの小学生に日本の絵本を英語で紹介する活動を行った。自分たちで選択した絵本が「場面・状況」となり，オーストラリアの小学生が読んでみたいと思えるような絵本を紹介することが「目的」となる。また，Web 会議システムを用いた異文化間交流の単元構成は,物理的距離があるオーストラリアと日本の小学生が,オンデマンドやリアルタイムで交流することを可能にした。時間や距離の制限があって，これまで実現が難しかった交流を，体験可能な交流にしたのが ICT を活用した学習活動である。相手の顔を見ながら交流する場面を設定することで，子どもたちが主体的に英語で伝えたい，相手が話す英語を理解したいという願いを叶える単元構成を可能にした。

(2)　省察の活性化につなげるための，ICTを活用した学習活動の充実

英語で話す自分の姿をタブレット型端末で繰り返し録画・視聴したり，Teams で他のグループの動画を共有したりすることは，子どもたちが主体的に疑問や困り感を解消しながら，内容面や言語面での気付きを促す上で有効であった。録画・視聴だけでなく，動画を視聴した振り返りを全員が Teams で共有したことで，自分と他者の学びを比較しながら，新たな気付きを得る姿も見られた。

また，帯活動などで“How is the weather in Sydney?”や“What time is it in New York?”など，慣れ親しんだ表現の発音が正しいかどうかを確認するために，タブレット型端末の音声入力機能を活用した。自分の知りたい都市について，子どもたちが思い思いに検索をし，話した英語が正しく認識されているかを何度も確認する中で，英語が伝わる楽しさを実感することができた。これらの ICT を活用した学習活動が，子どもたちの内容面や言語面での気付きを促し，省察の活性化につながったと考える。

２　課題　子ども自らが英語での発話量を増やしていくための手立て

子どもたちの英語での発話量を確保することが課題である。

単元を通して，インプットやインタラクションの場面で，子ども自身が，英語での意味のあるやり取りを充実させていく必要がある。このことが，自分が言いたいことを英語で表現できる姿につながると考える。インプットとインタラクションの場面に，HRT と ALT による Small　Talk や ALT と子どもたちとの英語でのやり取りを取り入れていくことで，英語での発話量を保障できるものと考える。これらのやり取りの中にインフォメーションギャップを取り入れ，自分の思いや考えを伝えるための語句や表現を繰り返し用いたり，相手や場面を変化させたりするなど，アウトプットへつなげる手立てを模索したい。